

4 野 菜

(1) 活動の重点指導事項

- ア 園芸主産地の再編強化（トマト、加賀丸いも）
- イ 園芸主産地の生産力向上
（ブロッコリー、かぼちゃ、にんじん、だいこん、千石豆、ねぎ）
- ウ 新規栽培者育成による産地拡大（たまねぎ、なす、加工用トマト）
- エ 新規産直農家の育成

(2) 活動の経過と実績

ア 園芸主産地の再編強化

(ア) トマト

- a 春トマトは2～3月の好天で生育は早まったが、4月の日照時間が少なかったことから、初出荷は例年並みの5月8日となった。5月以降は日照時間が多く、6月中旬に出荷最盛期を迎えた。

夏秋トマトは、7月下～8月中旬の高温により、葉が小さくなり果実肥大が鈍化した。また、8月末の多雨により特に土耕栽培で放射状裂果が発生し、9月上旬の出荷量の減少につながったほか、8月下旬の開花段が着果不良となり、10月中下旬の出荷量が減少した。

また、暖冬の影響でアザミウマ類が激発し、春、夏秋トマトとも被害が大きかった。

- b 平成23年に策定した「トマト産地再編計画」に基づく取組の結果、生産面、販売面の成果は上がったが、新規参入者と後継者の育成に係る担い手対策の成果が不十分であり、農家の高齢化や後継者不足により産地規模の縮小が続いている。

このため、若手農家3人とJA、普及で「トマト産地再編検討チーム」を設置し、魅力あるトマト産地づくりに向け、①儲かるビジネスプランの策定、②新規参入者の受入体制の整備、③JAを中心としたハウスバンク制度の創設に向け、検討を開始した。



農地貸借の優良事例視察

- c コマツと連携した地下水冷房装置の活用による収益性向上技術については、大玉トマトの長期多段どり作型2か所、抑制作型1か所、中玉トマトの夏秋作型1か所で、ハウス内環境制御と生物農薬を活用した病害防除の現地実証を行った。

また、東レと連携した遮熱資材の活用による生産性向上技術については、抑制作型2か所で現地実証を行い、適正な光透過率の検討と果実品質の調査を行った。

(イ) 加賀丸いも

- a 害虫被害は少なく初期生育は順調で、7月は日照時間が多く、茎葉は順調に繁茂した。8月から9月にかけてのいも肥大期には、適度な降水があった。昨年よりも小ぶりだが、形のいいものが多かった。
- b 高うね成形機やきゅうりネットの省力化技術の導入状況は各地域によって異なるため、JA根上、JA能美、JA小松市の3JA合同で現地検討会を開催し、省力効果の紹介を通じた導入拡大を図った。

- c 工業団地の進出などにより栽培適地が減少し、ベテラン農家もほ場の確保が難しくなっている。生産者が簡便に優良ほ場を探して借りられる体制を確立するために、JA、農業試験場と協力して適地ほ場マップの作成を開始した。今年度は、過去3年の栽培履歴のデータ化、篤農家への優良ほ場に関する聞き取り調査、五間堂地区のほ場の土壌の物理性の分析を行った。



飲食店へ「丸いもザチャレンジ」の協力依頼

- d 南加賀地区丸いも生産協議会の活動支援を通じてでは、加賀丸いもの知名度向上に向けて、「丸いもザチャレンジ」と称し、県内の各種料理店の協力を得て、丸いもを使った新たなレシピ開発とSNSを活用した情報発信を行った。また、最上級品質の「プレミアム」の初競りを開催するなど地理的表示保護制度（GI）の登録を活用したPR、情報発信活動を支援した。

イ 園芸主産地の生産力の向上

(ブロッコリー、かぼちゃ、にんじん、だいこん、千石豆、ねぎ)

(ア) ブロッコリー

- a 春作では、4月の低温で早い作型の初期生育はやや緩慢となり、初出荷は昨年より3日遅い5月10日、出荷ピークは6月上中旬となった。病害虫被害は少なく、出荷量は前年比128%となった。

秋作では、8月下旬の長雨で、一部の圃場で定植作業が遅れ、さらに、同時期の低温と低日照、9月の少雨の影響で、全体的に生育の遅れが見られた。病害虫では、9月中旬から黒すす病が発生し、大きな被害となった。初出荷は、昨年より7日遅い10月7日、出荷ピークは12月下旬となった。生産量は後半持ち直したが、販売高は減少した。

- b 近年、根こぶ病が多発しており、発生状況調査の結果に基づく対策（土壌診断に基づく酸度矯正、排水対策の徹底、薬剤処理、おとり作物＋薬剤処理）の指導を行った。

(イ) 加賀かぼちゃ

- a 4月の低温でやや遅れ気味の生育となった。一番果着果節の開花ピークは平年並みの5月下旬～6月中旬となったが、草勢が強かったほ場や、人工交配を行っていない圃場で着果不良が見られた。着果不良、乾燥中の腐り果の発生により、出荷量は減少となった。

- b イオンのPB（グリーンアイ）向けにグローバルGAP相当のGAPの取組を支援し、通常の市場価格より有利な高単価で販売された。また9月、イオンのPBに取り組むJA加賀GAP研究会（7名）は、県内で初となるJGAP団体認証を取得した。

- c 抑制作は、播種後の7月中旬以降、気温は高く、降水量も十分あったことから、生育は順調に進んだ。しかし、8月25日、29日、9月23日の強風による茎葉損傷の被害に加え、病害虫では、ウリハムシの発生が多くみられ、一部で収量が大幅に減少した。

(ウ) 能美かぼちゃ

- a トンネル早熟栽培では、一部、開花期の低温および降雨によって着果不良がみられたが、5月中旬からの高温で推移したことから果実肥大は良好であった。また、試験的に導入した「味平M」は、品種特性に合わせて窒素施肥量を減らしたことにより、草勢をコントロールすることができ、収量が向上した。

販売については、昨年に引き続き規格外品の鉄コンテナ出荷を行い、出荷数量、販売額ともに増加した。

- b 抑制作は、順調に発芽し、8月中旬以降適度な降雨、着果時期の9月上旬以降の好天により順調に生育した。10月12日の台風19号による大雨の暴風雨による収穫直前の果実への影響が心配されたが、大きな損傷や病害は見られず、収量、販売額とも前年比160%程度となり、好調であった。

(エ) 小松かぼちゃ

- a 定植期に適度な降雨があり、5月中旬からは多日照・高温で推移したことから、生育及び着果は良好であった。梅雨明けが遅く周期的に降雨があったことから、一部の圃場では疫病が発生した。果実肥大は良好であり、収穫量は平年並となった。

(オ) にんじん

- a 市場が求める赤芯系品種「アロマレッド」への切替が完了し品種が統一された。
- b 播種後の8月中旬に台風が襲来し、8月末には集中豪雨もあり欠株が多く発生した。
10月以降は日照も多く生育は良好で、平年並みの11月11日より出荷が開始されたが、台風や大雨の影響により出荷量は少なくなった。
出荷期間中は、温暖な気候が続き、収穫・出荷作業が順調に進んだことから例年より早い1月17日に出荷が終了した。
- c 昨年度より1畦8条のうち中央付近の条の肥大が劣り、大きさが揃わないことが問題となっていたことから、本年度は7条植えとし、中央部の条間と株間を広くすることで、生育差がやや改善された。より揃いが良くなるよう播種密度及び方法について、引き続き検討を行う。



掘り取り機による収穫

(カ) だいこん

- a 春だいこん
播種は2月27日から始まり4月上旬まで順次行われた。
3月以降は温暖に経過したため、生育は順調に進み、出荷は5月20日と前年並（5月19日）となった。収穫期の5月中旬以降、高温乾燥で推移したことから肌のかさつきや内部障害が散見された。
- b 秋冬だいこん
播種期である8月下旬から9月上旬にかけて台風が襲来し、一部で圃場の畝が崩れた。また、8月から12月まで平年よりも高温で推移し、根部肥大は順調であったが、センチウ、キスジノミハムシの被害が見られたほか曲がりの発生により外品が多かった。

(キ) 源助だいこん

- a 1粒播きのため、台風による欠株の発生が懸念されたが、被害はほとんど見られなかった。
- b 初期生育期が高温で推移したことから、ハイマダラノメイガなど害虫が多発したが、防除の徹底により被害はみられなかった。
11月は平年を上回る日照量となり、根部肥大は良好であった。

(ク) 千石豆

- a 開花始めは平年並みの4月中旬となった。4月～5月は好天に恵まれたことから、初期生育は順調に経過した。初出荷は前年より6日早い5月8日に行われ、出荷終了も前年より5日早い7月12日となった。
- b また、東京のアンテナショップで試食販売会を実施し、千石豆の消費拡大活動にも継続して支援を行った。

(ケ) 小松ねぎ

5月および9月の高温の影響でやや遅れ気味の生育となった。5月頃からハモグリバエが多発し、県内の他産地でも多発傾向となり、7～8月に発生ピークを迎えた。また8月下旬からの高温と多雨により軟腐病も多発した。

(コ) 加賀ねぎ

- a 播種からは順調に生育が進んだが、5月から乾燥傾向となり、やや遅れ気味の生育となった。病害虫では、白絹病、軟腐病、ハモグリバエが発生した。とくに7月下旬～9月中旬にハモグリバエの被害が大きかった。
9月の高温・干ばつで生育が緩慢となり、出荷がまとまるのは11月上旬となった。11月以降も、平年より気温が高く、積雪が少なく経過したことから、年明け後も継続して出荷が行われた。

ウ 新規栽培者育成による産地拡大

(ア) たまねぎ

- a 平成30年の11月には生産者18戸、栽培面積約5haの作付けとなった。今冬は暖冬で降雪量も少なかったことから、順調に生育した。収穫期には全体の1割程度で抽苔が見られたが、大幅な収量増となった。また、サブソイラーで耕盤を破碎する排水向上対策の実証ほを設置した。収量は、慣行区が2.8t/10aのところ試験区で4.8t/10aと増加した。
- b 本年は豊作傾向となり、JAの選別、乾燥・調製施設の処理能力がオーバーしたことにより、調製前のたまねぎに黒すす病が発生し、大量廃棄された。
このためJA能美では、産地パワーアップ事業を活用し、新たに乾燥・調製・選別機を導入し、乾燥・調製施設の能力増強を行った。

(イ) 川北なす

夏場の高温により生育の遅れが見られたが、大きな病害虫の被害はみられなかった。生産者1名が出荷できなかつたため、前年に比べ出荷量が減少した。

(ウ) 加工用トマト

- a 平成29年度よりJA小松市管内で新たな転作品目として、コーミ(株)との価格契約取引による加工用トマトの露地栽培を開始しており、本年度は17戸の生産者が栽培に取り組んだ。
- b 5月中旬より定植を開始し、好天に恵まれ初期の生育は順調であった。一部の圃場では、5月下旬の高温により青枯病などの病気が発生した。
- c 6月は高温に推移し、オオタバコガなど害虫の発生が多く見られた。また、梅雨明けが遅く、連作圃場を中心に青枯病等の細菌病や白絹病が発生したものの、適期防除の指導を行った。
- d 出荷は7月22日から8月23日まで行われ、防除等の徹底により単収は前年を大きく上回った。

エ 産直農家の育成

直売所へのお荷を指向する若手農家などに対し、品種の選定や病害虫防除対策などの情報提供を行った。

管内の主要野菜の生産販売状況

品目	産地名	栽培面積 (ha)	農家数 (戸)	販売量 (t・千本)	販売金額 (千円)
トマト (春) (夏秋)	小松	6.1	42	718.9	171,735
	小松	5.6	47	349.2	133,536
ブロッコリー	加賀	118.9	50	565	233,138
加賀丸いも (H30年産)	小松	1.3	9	11.9	7,380
	能美	3.0	7	44.0	30,819
	根上	4.1	20	49.6	37,868
加賀しろねぎ	小松	6.0	21	55.0	22,972
	能美	0.1	1	2.6	790
	加賀	3.8	21	17	6,111
かぼちゃ	加賀	48.6	82	215.6	38,662
	能美	6.1	27	23.9	5,050
	小松	2.0	16	18.8	3,781
きゅうり (春) (抑制)	小松	0.2	5	19.1	5,216
	小松	0.5	6	63.4	21,260
だいこん (春) (秋冬)	小松	0.9	5	51.9	3,817
	小松	1.4	5	37.2	3,728
千石豆	小松	0.5	8	10.8	10,626
にんじん	小松	5.6	12	104.1	12,293
すいか	加賀	3.6	2	88.8	10,804
いちご	小松	0.06	3	0.6	712
なす	川北	0.3	5	14.1	3,746
源助だいこん	小松	1.8	1組織	57.1	4,268
日向源助だいこん	小松	1.1	4	23.1	2,116
自然薯	加賀	0.2	7	0.4	995
たまねぎ	能美	5.0	19	160.4	11,260
加工用トマト	小松	1.2	17	30.7	2,292

※令和2年3月現在 (南加賀農林総合事務所調べ)

管内のJA直売所の産直販売額 (平成31年1月～令和元年12月)

直売所名	オープン	産直販売額 (千円)
あぐり (JA小松市)	H14	448,206
いきいき市 (JA根上)	H17	18,944
元気村 (JA加賀)	H21	286,870
じのもんや (JA小松市)	H22	251,919
能美の市 (JA能美)	H23	233,182
えちゃけな (JA小松市)	H29	9,370

5 花 き

(1) 活動の重点指導事項

- ア 主要な花き産地の活性化
(小ギク・切り花はばたん・ストック)
- イ 新産地の育成 (フリージア)

(2) 活動の経過と実績

- ア 主要な花き産地の活性化

(ア) 小ギク

- a 5月上旬から日照時間は多く気温は高めに推移したが、乾燥傾向となったことから、草丈が短く葉色の薄い圃場が見られた。生育期間中の平均気温がやや高めに推移したことにより、開花はやや前進した。
病害虫では、一部で黒斑病の発生が見られたが、大きな被害には至らなかった。出荷量、販売高は、生産面積の縮小に伴い減少した。

(イ) 切り花はばたん

a 加賀

定植は例年どおり8月下旬から開始された。9月以降の平均気温が高く推移したことから生育は順調に進み、露地栽培、ハウス栽培ともに草丈は十分確保できた。11月2日から平均気温が15℃を下回ったが、その後、気温は平年より高めに推移したため、着色は緩やかに進んだ。病害虫では、一部で黒腐病、ヨトウムシ類の発生が見られた。出荷量、販売額は昨年並みとなった。

b 小松

播種期の7月中下旬は高温となったため、発芽不良がみられた。この高温は定植期の8月も高温傾向が続き、活着不良による欠株や生育の不揃いが発生した。

また、生育期間を通して気温が高く、ヨトウムシ類やタバコガ等の害虫が多発したが、防除の徹底により被害は少なかった。

相次ぐ台風の影響により、雨による冠水被害や肥料の流亡が発生し、一部ほ場で肥切れや生育不良が発生した。

10月以降は晴れの日が多く12月後半まで気温は高めに推移した。この影響により、着色不良や色戻りが発生した。

以上、初期生育の不良や色戻りが発生したことにより、出荷量・金額は平年を下回った。



(ウ) ストック (平成31年産)

- a 11月は温暖に進み、出荷は平年並みに始まったが、12月は低温となり年内の出荷量は少なくなった。年明け以降は気温が平年を上回ったため、出荷量が増えて2月に出荷がピークとなった。

また、暖冬傾向となったことから、霜の被害は少なかった。

- b 栽培技術向上に向けて、先進産地である兵庫県JA淡路日の出へ視察を行った。

イ 新産地の育成

(ア) フリージア (平成31年産)

- a 加賀地区では、雪害によるハウス倒壊と高齢化で生産者数が1名減少したが、J Aと協力し作付拡大を呼びかけた結果、1名が規模拡大した。能美・小松地区では、昨年度に、作物担当やJ A担い手担当と連携してリストアップした農家から、新規栽培者を募った結果、2戸の農家が水稻育苗箱栽培を開始した(18,500球ハウス約3a)。11月以降の好天により、出荷が大幅に前進したものの初年度ながら定植球根数の60%以上を市場に出荷できた。
- b 11月が温暖で日照時間が長く、その後も暖冬で推移したことから開花は早まり、促成栽培では指針より3週間早く出荷が開始され、季咲栽培では、畝被覆が行われたところで、3月上旬からの出荷となった。
- c 出荷率の向上に向けて、促成作型では定植時の遮光を行うとともに、草丈確保のために10月末から内張り被覆による保温管理を指導した。季咲栽培では、草丈確保のために9月中の定植を呼びかけるとともに、3月の需要期に出荷するため畝被覆による保温管理を指導した。
- d 次年度に向けて、水稻高密度播種育苗栽培技術の講習会でエアリーフローラ栽培のPRを行い、栽培希望農家(1戸)を対象に加賀市の栽培圃場を見学させるなど重点指導を行った。

管内の花きの生産販売状況

品目	産地名	栽培面積 (ha)	農家数 (戸)	販売量 (千本)	販売金額 (千円)
砂丘地けいとう	小松能美	0.06	2	18	630
トルコギキョウ	小松能美	0.10	3	16	2,020
ストック	小松能美	0.70	6	140	8,651
小ぎく	加賀	0.20	10	7	311
切り花はぼたん	小松能美	0.40	10	63	4,132
	加賀	0.20	14	37	2,501
ひまわり	小松能美	0.05	1	5	163
フリージア(H31産)	小松能美	0.30	10	23	959
	加賀	0.25	5	30	1,608